

昭和SPレコードで辿れば

ラッキーレコードと米国の軽音楽

SPレコード収集家■城内 實

楽が相当愛好されていたことだけは間違いない。

(一)

その証拠に昭和九年になると

今年の夏のあの猛暑はどこへやら、金木犀の香りとともに秋がいつのまにか訪れている。秋の夜長にはやはり読書だが、SPレコードを聴くのもまた楽しい。

た。プリアンプにMcIntosh C-20、メインアンプにMcIntosh MC-30×二台、そしてスピーカーにJensenのOld Imperial一對、それに従来から使用しているプレーヤーのGarrard 401、いずれも四十年頃前の機器である。

不思議なことに古い真空管ア

最近のように少し肌寒い秋の夜になると、スピーカーから流れてくるSPレコードの音色とともに、真空管アンプから発するほのかな光と熱が部屋を適度に温かくし、大変心地良い気分にしてくれる。

ンプを使ったSPレコードの音は格別であり、現代のどんなに高級な機種を使ってもこのような素晴らしい音色は出ない。ところが欠点が一つだけある。真空管アンプが三台も並ぶと大量の熱を発生し、夏になると部屋の温度が異常に高くなり、レコードどころではなくなるのである。おまけに電気代も食う。

昨年春のことであるが、蟋蟀のような生活をしている貯金ゼロの筆者は、どちらかというところ、どちらかというところ、蟋蟀の妻から夏冬のボーナスを前借りして思い切ったSPレコード用の音響機器を一新し

フルトヴェングラー指揮のベルリン・フィルのレコードを聴くような場合には、竹針を使って当時の最高級の蓄音機で聴く方がそれぞれの楽器の微妙な音色の違いが分かって良いが、戦前のジャズのレコードにはやはり電気的再生の方がしっくりくる。

以前本誌で紹介したように、戦前には数多くの米国の軽音楽盤が発売され、ジャズ喫茶でそれらの音楽を日常的に聴くことも出来たし、唯一のラジオ局であったNHKで放送もされた。

ラッキーレコードには、シカゴ・ジャズの流れを汲むエディ・コンドンの名盤中の名盤と言われているHome Cooking、The Fatが吹き込まれた盤があったり、デューク・エリントン、ビング・クロスビー、フレック

もちろん大東亜戦争勃発とともに米国の軽音楽のほとんどが発禁の憂き目に合うのであるが、昭和の初期から昭和十四年頃にかけて都会のサラリーマンや知識階級の一部の間で米国の軽音

(二)

ド・アステア、ミルス・ブラザース、ヘンリー・レッド・アレン、ガイ・ロンバード、ジャン・ガーバー、ハル・ケンプトといった三十年代の米国を代表する楽団やスター歌手のレコードが数多く発売された。筆者は黒人トランペット奏者で歌唱力も抜群のレッド・アレンのものを好んで聴いている。

(四)

同じように日本ポリドールからは米国デッカ盤が発売され、これまたジミー・ランスフォード、グレン・グレイ、アール・ハインズ、ジミー・ドーシーといった楽団の演奏が聞ける。

昭和十三年頃のポリドールのジャズ盤のレーベル上に「報國」の小さな二文字が印刷されているものがある。大陸で戦争が行われていることから、当局の行政指導により自主的に入れたのであろうが、ジャズのレコードに「報國」の文字はあまりにも無粋だという指摘がおそろくなされて、その後の盤からこ

の二文字はなくなっている。

(五)

昭和十八年一月には内閣情報局と内務省が「米英音楽作品蓄音機音盤一覧表」を発表し、米英音楽約一〇〇〇曲が禁止された。これによりさすがに、敵国アメリカの軽音楽を放送したり、発売したりすることはほとんどできなくなつた。ところが、手

元に昭和十八年後半にニッチクから発売されたVic Maxwell and His Dance Orchestraの Loves Gone (夢去りぬ) という比較的今でも有名な曲のレコードがある。これには堂々と英語の曲名がレーベルに刻まれてあり、敵性言語の英語で歌われている。タンゴ調でアメリカ的なスイート・ジャズではないものの、何故このようなレコードが統制下の日本市場で発売されていたのか、今もって謎である。

(六)

さらに、もっと不思議なレコードをだいたい前に偶然手に入れ



た。これもニッチク盤であるが、テディ・パウエル楽団の演奏するアメリカの大変ムーディーなスイート・ジャズが吹き込まれたものである。⑫の物品税の刻印と粗悪な盤質から、昭和十九年五月頃以降にプレスされたものであることが分かる。レーベルには「特別製造」とある。同じニッチクの特別製造盤では内田信也農商大臣が吹き込んだ「米の報奨制度について」という放送用に作られたレコードを持っている。

JOAK・業務資料室というシールが貼ってあるが、JOAKとは現在のNHK東京ラジオ第一放送である。こうしたこと

から、筆者はこのレコードは、対米宣伝放送に使われたレコードにほぼ間違いないと考える。昭和十九年六月には米軍がサイパン島に上陸しており、おそらくその頃のレコードであろう。この年になると戦局がますます悪化し、七月には東條英機首相が退陣した。

東京ローズの甘い誘惑するよな声とともに、このニッチク盤のスイート・ジャズのレコードを当時の米軍が南方の前戦で皇軍将兵と戦いながら聴いていたのではないかと思うと、妙に切ない気分になる。(続く)